

之からば進みては彼國をうつ事あたはず、退きては賊徒を征せむ事かたからん、これ危亡の道なりと、太閤聞て大に怒り、長政を引たて禁籠せしめんとす、東照宮迄ゐてこれをとゞめ、長政をして宿所にかへらしめたまふ、二年、薩摩國の梅北宮内左衛門某一揆をおこし、肥後國を掠め、熊本城を襲ひとるのよしつげありければ、太閤大に驚き、諸將をあつめて評議せられ、長政は肥後國の案内者たるにより、まづ彼をつかはすべしとて、すなはちめし出され、太閤仰ありけるは、先に汝が諫めしところ、今日はたして其然る事をしれり、すみやかに彼國におもむき、賊徒の虚實をうかがふべしとなり、

〔備前老人物語〕一、池田三左衛門殿の家老伊木清兵衛病て、ふして既に末期に臨しに、我今生の望ある也、今一度君の御目にかゝりたき也とありければ、三左衛門殿きこしめし驚給ひ、いそぎその家にいたり、枕にちかづき給ひ、○中 清兵衛頭をあげ兩手を合、これ迄の入御ありがたく冥加至極せり、○中 たゞ一つ申たきこと候へば、これを申さずして、むなしくなりなんこと、妄執なるべければ、乍恐申すなり、公つねに物ごと、ほり出しをこのませ給ふ御病あり、中にも士のほり出しを専とし給ふこと、よからぬ御病なり、士はその分限よりは、一際よろしくあてがはせ給ひてこそ、長く御家を不去、忠節を存すべしと申ければ、三左衛門殿つくづく、と聞給ひ、只今の諫言道理至極せり、其志山よりも高く、海よりも深し、生前におゐて忘却すべからず、こゝろやすくおもふべしとて、清兵衛が手をと、り、なみだを流し、なごり惜しげにわかれ給ひたりけり、君臣の情あはれなりしありさま、その、ち家風ますくよくなりしとぞ、

〔藩翰譜四上〕榊原 康政夜に入て、徳川殿の御前に參り申すやう、こたび中納言殿○徳川秀忠 御不審蒙らせ給ふ事、康政等が罪科、最も輕かるべからず、たゞし風聞の及ぶ所、中納言殿上田の城を攻おとし給はず、又押ても御通りなく、殊に海道の合戦にも、あはせ給はぬ事を、御不審ありと承り候ひぬ、